脳血管障害罹患後に外来通院可能となった血液透析患者の背景調査
－　KDQOL-SF™による評価

長崎腎病院
〇岩本まゆみ　白濵美和　山中真樹子　丸山祐子　原田孝司　船越　哲

【背景】
維持透析患者は、一旦脳血管障害を発症して入院すると、在宅への復帰が困難と考えられる。

【目的】
外来通院可能となった脳血管障害血液透析患者の背景因子を調査する。

【対象と方法】
2012 年 12 月 1 日に在籍している外来血液透析患者 284 名のうち、有効回答を得られた脳血管障害による入院を経験した 30 名(以後、既往者)および非既往者 66 名およびを対象として、KDQOL-SF を用い比較検討した。

【結果】
既往者は外来維持透析患者の 13.7%平均年齢 68.2 歳、介護保険保有者は 59.0%であった。既往者の KDQOL-SF は非既往者と比較して「ソーシャルサポート・人との付き合い」で高い傾向がみられた。「日常生活への影響」などその他の要素では優位差が認められなかった。

【考察】
包括的 QOL 尺度で既往者と非既往者で差がなく、外来通院継続のためには ADL を維持することが必須であると考えられ、また患者家族など周囲への支援がポイントの一つと思われた。